

佐伯史談会三十周年記念事業について

塩 月 佐 一

(会員・佐伯市匠南区)

昭和三十三年三月、第一次佐伯史談会が、ついで、五月に鶴岡郷土史研究会が発足した。この二団体は、昭和四十年に待望の合併をし、第二次佐伯史談会が発足今日に至っている。昭和三十三年より数えて、明年は三十周年にあたるので、今年から本格的に記念事業に取り組まねばならない。

記念事業の大項は、去年の役員会で既に決定を見ているが、次の様な計画である。

その一は、羽柴先生の記念碑の建立である。今日の佐伯史談会は、先生の汗と献身の賜物である。夏も冬も寸暇を惜しんで鉄筆を握り、ガリ版をきり続けた先生の熱意と努力から生れたものが佐伯史談会である。

この羽柴先生の異常とも言える御努力も、年移り代がかわれば、次第に忘れられてしまうのが人間の常である。

私達は先生の並々ならぬ御努力を、後世にまで伝える義務がある。そのためには記念碑を建設したいと考えている。

建設場所は、本年の第一回の役員会で決定したい。建設資金は、会員全員で建立するという意味で、全会員に浄財をお願いしたいと考えている。会員のみならず、その折にはよろしくお願い致します。

第二は、「佐伯史談」の総索引を作製することである。「鶴岡郷土史研究」二十二巻、「佐伯史談」百四十三巻の総索引を作製し、研究に役立てたい。

第三は、羽柴先生の伝記を作製することである。これは皆さん御存じの在京作家御手洗一而氏に既に依頼し、承諾をいただいている。

第四は、先生のご命日を「羽柴忌」(仮称)として、

毎年墓前祭を行い、先生の御遺徳をしのびたいというところである。

以上のようなことを計画しているが、間もなくそれぞれの実行委員会をつくり、実行に移したい。会員の皆さんの御協力をお願い致します。

以上が記念事業のあらましであるが、若干の余白があるので、羽柴先生の御苦勞の一端を紹介したい。

羽柴先生は、発足当時から佐伯史談会と鶴岡郷土史研究会の事務局長を兼ねていた。佐伯史談会は、佐藤鶴谷・柴田南華・山田平之丞・平田幸一・疋田泉等の大家揃であった。俗に言う船頭多くしての例の通りか、それとも他に理由があつたのか、とにかく目立った活動は何もしなかった。

これに引きかえ、素人ばかりの鶴岡郷土史研究会は、当初からどんどん仕事をした。羽柴先生は特技のガリ版を活用した。会員も奮って投稿し、毎月半紙六頁から八頁の「郷土史跡研究」という小冊子を発行し、郡部の同好の士にもこれを配布した。七月には「鶴岡地区史跡観光案内記」十六頁を発行し、現地研究に活用するばかり

でなく、一般にも広く配布した。この用紙代は鶴岡地区商工会に寄付を仰いだ。

羽柴先生の精力的な活動に励まされた会員は、これも負けじと投稿した。定期の「郷土史研究」に掲載しきれない時は、その都度号外を出した。

しかし、この謄写印刷は気易くできたものではない。八月号の「編集後記」の一節に次のような文がある。

御覧の通り本号は文字が不出来、筆者この暑氣にいささかたびれ気味、書いていると汗がだらだら流れる。窓を一ぱいあけて風を入れると、原紙がめくられて、どうにもならない。やすりや鉄筆の調子も極めて不良つくづくいやな思ひになやむ。御寛恕ありたい。室内でも三十二度をこすこの猛暑・・・以下略

とある。精力的や矢継ぎ早の印刷物も、生みの親は難渋していた。それでも羽柴先生は暑さにめげず八月臨時号まで出している。

発足一年目は順風満帆の感があつた鶴岡郷土史研究会も、二年半ばにして早くも危機が訪れた。機関史の原稿がさっぱり出なくなつた。書く材料がなくなつたのである。頼んでも催促しても原稿は出なかつた。羽柴先生

は自分の文で機関誌をうめることは絶対にしなかった。自分の文だけの時は号外として発行した。

「鶴岡郷土史研究」は、一年半ばにして自然休刊のやむなきに至った。羽柴先生は

「一人でもよい。行を共にして下さる方があれば、郷土史研究の火は絶対に消さない」

と決意を述べ、継続の方法を模索した。

お 願 い (事務局から)

一、同封の振替により、会費は早目に御送付下さい。忘れないために。

二、会費についての御照会は会計係の山本保氏にして下さい。事務局塩月ではわかりませんので、山本氏の住所は佐伯市池船町八班 電話二一四九七〇です。

三、同封の振替用紙をなくした時には、最寄の郵便局でもらって下さい。無料でくれます。振替番号は巻末の奥付にもありますが、下関八一三三九九一で、宛名は佐伯史談会です。

振替による送金が一番安くて、安全です。
四、事務局だよりや旅行案内にもよく目を通して下さい。この人がと思われる方が「そんな旅行は知らなかつた」と申される方がだんだんありますから。一頁大で人員募集をしているのに。